

鉄を通じて暮らしを支える

株式会社 渡辺鉄工



成長期
株式会社渡辺鉄工は1965年、四日市のコンビナートで配管工をしていた現社長の渡邊真剛氏の父・安博氏が独立し、鈴鹿市若松に工場を構えた。当時近隣にある多くの海苔養殖業者が板海苔の全自動製造機の導入を進めており、配管工事だけではなく、海苔の製造工場を建築

する工事を請け負ったことが建築業の基礎となった。真剛氏は高校卒業後、四日市内の建築会社に勤務した。23歳になる1978年、結婚したいと両親に相談したところ、「家に戻れ」と言われたことから、建築会社を辞め家業に入ることとなった。同年建築工事業の県知事許

「鉄骨を通じて暮らしを支え、社会に貢献する」をモットーに、時代の変化に柔軟に対応し、厳しい労働環境に見られがちな建設業のイメージ刷新にも取り組む株式会社渡辺鉄工。渡辺鉄工は今日も、「スケールのデカイ仕事」に取り組んでいる。



代表取締役 **渡邊 真剛氏**

企業概要

所在地 三重県四日市市楠町北五味塚1256番地
TEL:059-397-5200 FAX:059-397-6005

設立 1991年(平成3年)12月

資本金 3,000万円

従業員数 21名(2019年2月現在)

事業内容 建築鉄骨の設計・施工、銅構造物工事業

URL <http://www.watanabe-tekko.com>



が入社する。人手不足をベトナムからの研修生により補っているが、これからの建設業界を支える日本人の若者を育成していくことが同社の課題だ。

ものづくりは品質管理

同社は、元請けの設計図からCADで施工図(立体図)を作成し、そこから鉄骨の加工図を作る。その図面を基に鉄骨を加工、現場での組立てまでワンストップで行う。大きな仕事では鉄骨600トンの規模だ。

建築鉄骨の品質保証の評価である鉄骨製作工場認定制度で「Mグレード」を取得しており、同社は鉄骨重量500(



楠工場

事業資金の管理を一手に引き受けていただけでなく、ワンマンで現場を取り仕切る社長が従業員に強く当たっていた時などに、照美氏は社長と従業員の間に入り、上手にコミュニケーションをとってくれていたという。照美氏が従業員の味方につき渡邊社長が孤立する場面もあり、「こっち側においてほしいのに、自分一人になつてしまうこともあった」と社長は当時を懐かしく振り返る。

しかし、縁の下の力持ちとして支えてくれていた照美氏は7年前に他界。寂しさが募る中、残された渡邊社長が特に苦労したのは資金管理で、照美氏の苦労やありがたみが痛いほどわかったと話す。「今の会社があるのは妻のおかげ」と渡邊社長は言つてはばからない。従業員にも慕われた照美氏の命日には、当時から従業員が欠かさずお参りに訪れる。

職場改革

現在、代表者と共に会社をけん引するのは息子で専務の純平氏。純平氏の主な仕事は、対外

600トンの仕事を請け負うことができる。四日市市楠町に約7,500㎡の本社工場と鈴鹿市に約4,300㎡の工場を構え、特に2トン以上のクレーンが16基並ぶ楠工場は壮観である。ここで生み出される鉄骨は、三重県を中心に愛知県や岐阜県などの様々な建築物の「骨」となり、社会を支えている。「自分達が携わった建物が完成したときの喜びは格別」と渡邊社長は話す。

また、渡邊社長は「ものづくりは品質管理」と言い切る。グレード取得には厳格な品質管理が必須なため、社内一定数の有資格者を置く。グレードは更新が必要であるため、品質管理体制を維持する社内ルールを作成し、その厳格な運用に努めている。同社はJASS6(鉄骨工事標準仕様書)を仕事の憲法としている。これを基に社内基本ルールを決め、更に同社は施工図・加工図の中にそのルールが厳守できるように明示するなど、徹底した品質管理体制を敷く。

すべての製品を社内100%徹底検査し、要求される以上の

的な業務はもちろんのこと、社内管理体制・福利厚生面の充実や社内での作業効率の改善も行う。また、三重県鉄構工業協同組合青年部会でも次世代として活躍している。

建設業界の従事者は現在高齢化が進んでおり、若年層の取り込みは急務である。純平氏は、その若年層の取込みと建設業のイメージアップに懸命に取り組んでいる。

従業員にも若者にも魅力のある職場を目指し、社内規則等の整備を行うとともに、鉄骨関連の資格取得を積極的に支援し、資格手当として給与に反映させた。難易度の高い資格にはさらに手当を増額。それをPRする



社員旅行にて

品質管理を行う。それは次の仕事にもつながることであり、字のとおり建物の「骨」、建物の基礎となる鉄骨に品質の妥協は一切許されない。

ベトナム事務所

同社は以前からベトナム人研修生を受け入れている。人手不足を補うためであったが、彼らは長くて3年で祖国へ帰ってしまふ。しかし、せつかく技術を身に付けてもベトナムには鉄骨の建築物は少ない。研修生からベトナムの状況を聞き、彼らの技術がベトナムでも活かせるよう、2019年3月に現地法人を立ち上げ、ベトナムでCADによる図面作成業務を可能にした。

現地法人の従業員は男性3名、女性1名の合計4名。渡邊社長は2か月に一度、2週間程度ベトナムに赴き、現地で指導を行う。現在では100トン以下の仕事を任せられるようになり、見積り計算もできるよう指導中だ。インターネット環境が発達した現在は、海外とのやり取りもスムーズである。

ホームページ制作や会社案内の監修も含め、これらは純平氏のアイデアである。

設備面では、作業環境改善と環境面への配慮から全ての工場の電機のLED化を行い、工場の省エネ対策にも取り組んだ。

働きやすくなった環境のもと、2017年には有給休暇取得率は平均70%を超え、2018年には中小の建設業者ではなかなか実現が難しい月2回の週休2日制も取り入れた。建築作業員全体が休暇を取得できる工程を組んでもらうよう元請け企業にも依頼している。

休日が増加しても業務に支障をきたすことはなく、逆に残業は減少したそうだ。休みがしっかりとれることで従業員の意識が変わり、業務効率を考えて仕事をしようになった。

効率化は業績にも反映している。従業員数に大きな変化はないが、ここ数年の売上増加率は2桁が続く10億円を超えている。職場改革は着実に好循環を起している。

今春には久しぶりに新卒2名

日本人のCAD技術者不足を補うだけでなく、将来的には他社からの施工図・加工図面作成依頼にも対応できるよう、腕を磨いているところだ。

代表者の夢、そしてこれから

社長の夢は、自社を三重県一番の鉄骨業者にすること、そして、建設業界全体のイメージを向上させることである。それを自分の会社から発信したいと意気込む。

これまで渡邊社長はワンマン経営で会社をけん引してきた。時には強引に、自分の意思を貫いてきた。しかし、世の中は常に変化している。ワンマンが通用する時代ではなくなってきた。同業とを実感しているという。同業者間の駆け引きや競り合いではなく、協力・共存していく経営へ。「若い世代の意見を大切に、周りや次世代とのコミュニケーションをとりながら事業を継続させていきたい」と話す。

自分の仕事有形となつて残る、この仕事の醍醐味は次世代にもつなげていくことだろう。

文〓会員事業部 河野努